

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【植水中学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	特に1年生は基礎計算力における課題が数学の苦手意識につながっていると考えられる。その改善に向けて、引き続き基礎計算力向上を目指し計算問題演習の時間確保を行う。社会では3学期から毎週月曜日に用語テストを始めた。徐々に生徒のテストに対する意識が変化し始め、知識の定着が進みつつある。知識・技能の定着を定期的に測り、自身の学習状況を把握する習慣をつけることが知識・技能の育成につながると考えている。	
思考・判断・表現	テストでは思考力を問う問題がいくつか出題されるが、生徒によっては、それを知識問題と捉えていることもある。例えば、中1理科「光」の単元で光がガラスから空気中に出るときの屈折の方向を推測する問題では、多くの生徒が光の方向を暗記する。ただし、光を通る媒体が光やガラスからその他物質に変わった瞬間、正答率が大きく下がる。結果だけを覚えるのではなく、その現象が起こる原理から、結果を推測する練習を繰り返し行う必要がある。	

今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題>特に数学科では、理解度が二極化している。そこで、少人数指導を3年生から2年生に変更して実施する。理由として、受験前に1年前でも早く取り組み、苦手な生徒により早く対応することができれば、苦手な生徒を減らすことができるのではないかと考えたからである。他教科にとっても、2年生の少人数指導の成果を今年の課題とした。 <指導上の課題>主体的、対話的に、深めるための学習を実施すること。	スタディサプリを活用し、基本的な計算等の反復・習熟に取り組む。その際、達成度を記録し、各自が達成状況や苦手な単元を振り返るようにする【毎週水曜日朝の会後に実施】。 例年実施している少人数指導を3年生から2年生に実施し、習熟度にあった課題に取り組めるようにする【通年】 主体的に取り組むために、導入問題の工夫 対話的に取り組むために、多様な考え方が出る課題 深めるために、整数から、小数や分数・負の数までに広げてみる。
思考・判断・表現	<学習上の課題>前の単元や昨年度の学習内容を活用することが苦手であり、特に関数の単元が、数量分野の最後で学習する領域だが、既習事項を活用できない。図形分野の性質や証明に時間を要する。 <指導上の課題>基礎的、基本的な学習の習得に重きを置いているため、思考したり、表現したりする時間を十分に確保できていない。	数学において、2年生で少人数指導を実施し、基礎・基本のコースと応用・発展な授業内容のコースに分けて、習熟度にあった内容の授業を選ぶようにする。【通年】1年生では、反転学習によって思考する時間を多く確保し、個人で考えたり、友達と教え合ったりする機会を作る【毎時間設定】。 主体的に取り組むために、導入問題の工夫 対話的に取り組むために、多様な考え方が出る課題 深めるために、整数から、小数や分数・負の数まで、三角形や四角形や五角形などに広げてみる。

全国学力・学習状況調査
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	年間を通してスタディサプリに取り組む時間を確保できたが、基礎計算力の向上には課題が見られた。2年生の数学習熟度別学習によって、生徒の実態に合った授業プランを進めることができた。その結果として、さいたま市学習状況調査では、知識技能の偏差値が上昇した。
思考・判断・表現	B	1年生では、反転学習によって思考する時間を多く確保し、個人で考えたり、友達と教え合ったりする機会を作った。また、思考の土台となる基礎計算力向上のために小テストを定期的実施し、補習まで行った。また、導入問題を日常の出来事と結び付けて提示することによって、判断の基準を現実的な事象に置き換えることができた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、正しい語句の漢字や意味を問われる問題が出題された。正答率は全国平均・市平均を共に上回った。理科の授業では漢字指定をするなど、日々漢字を書いたり読んだりする機会を意識的に増やしていることがこの結果につながったのではないかと考えられる。数学では、多角形の外角の意味を問う問題において、高い正答率を得た。理科では脊椎動物の分類や元素記号を問われる問題において、高い正答率を得た。一問一答の知識問題に関しては授業内で定期的確認テストを行っており、その成果が出たと思われる。	
思考・判断・表現	数学では、問題に対して根拠を持って解答する力が高く見受けられた。日々の授業から理由を説明する習慣をつけていることが今回の結果につながったと考えられる。理科に関しては、身の回りの素朴な疑問に対して探求する心を持っているからこその答えられる問題が多く、その正答率も全国平均を上回るものだった。このように得た知識を身の回りの現象などに使う習慣をつけることによって思考力は育まれる。そのトレーニングを行う場所が授業であり、そのトレーニングを正しく実行させるための方法を今後も模索していく。	

①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	理科では実験操作に関する知識が定着していなかったため、基礎的な実験操作を定期的に使って機会を創出していく必要があるといえる。また、「数学の授業の内容はよくわかりますか。」という質問と、各教科の点数には正の相関があった。特に理科では分数の計算問題があるため、基礎計算力(技能)が点数に直結していると考えられる。	
思考・判断・表現	昨年度からの経年変化(中2)を見ると、知識・技能の伸びに対して、思考・判断・表現の伸びが少ない(もしくは下がっている)状態であった。このことから、本校の生徒は自分が持っている知識を活用することに対して課題があるといえる。中1理科では、グラフの読み取り問題で市平均を上回る結果が出た。これはグラフを書く授業を通して生徒がグラフの意味を理解することができたからだと考えられる。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	毎週のスタディサプリ実施を継続できた。基礎計算が今後の方程式等の学習に生きてくると思われる。2年生における数学の習熟度別授業では生徒の希望に沿って進められている。	特になし
思考・判断・表現	B	友達と教え合う活動を通して、自分の解答の過程をより正確に把握することができるようになった。様々な教え方があるため、問題を多様な視点から捉えることができるようになった。	特になし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)